

山本正志のウズベキスタン旅行記

2008年3月7日～13日 企画：日本ユーラシア協会京都府連合会
ヒヴァ ブハラ シャフリサブス サマルカンド タシケントの旅



3月7日（金） 出発

午前9時40分自宅発、車内には山下さんと宇治の西川さん、その後、外川さん、駒井さんと合流、名神高速に入って関西空港へ。12時前に空港着。一同26人そろって出国手続きをすませて成田経由関西空港出発のウズベキスタン航空機でタシケントへ。機内はガラガラで自由席。約8時間余りのフライトでタシケント空港着。

現地のガイドはシュンコルさんで、自称「ウズベクの細川隆」とか。大阪、京都にも来たことがあるという日本通。ホテルは街外れの高層のタシケント・マルカジィホテル。今回は西川さん（元人形劇団京芸）と同室。日本時間では夜中の2時過ぎ、ホテルの外へ出てみたが周りには商店街やホテルもなく、街外れの高層ホテル。これでは「ちょっと一杯」と外出もできないいわば隔離状態。寝るしかない。

8日（土）ヒヴァへ

午前4時過ぎに起きてコーヒーとパンだけのモーニングサービスで、朝まだ暗い5時20分ホテルを出発。7時にタシケント空港から国内便でウルゲンチへ。約1時間半でウルゲンチ着。しかし寒い！気温は3℃。バスで歴史都市ヒヴァへ。周りは広々とした畑。綿花や麦、果物の生産が主だという。ヒヴァのマリカホテルに到着、とりあえずコート類を出して防寒対策をして城壁にかこまれた古都ヒヴァの歴史地区イチャン・カラを見学へ。

イチャン・カラ

ウズベキスタン西部ヒヴァの城壁に囲まれた旧市街地で 1990 年に、ユネスコの世界遺産に登録された。イチャン・カラ旧市街には、50 以上の歴史的建造物と主に観光に従事する人たちの古い住居が残る。これらの建築物はおよそ 18 世紀から 19 世紀にかけて建設された。



イチャン・カラには四面に設けられた 4 つの門があるが、それらの土台は、10 世紀に作られたと伝えられている。現存の 10 メートルの高さを誇る門は、17 世紀に修繕されたものである。右の写真は巨大な建設途上のミナレットで、最上階まで完成すると 100m を超える高さになるといわれている。



用語解説

モスク: 巨大なドームの形式のイスラムの礼拝堂。必ずしもドーム形式の建築様式だけでなく時代・地域によって様々。モスク内部にはメッカの方角の壁面にミフラーブ（窪み）があり、信者はこの方向に向かって礼拝する。モスクは礼拝の場であるとともに説教、祭礼、結婚・葬儀、学問の講義、支配者の政治行為など多様な用途を併せ持っている。



メドレセ: イスラム法の専門家を養成する伝統的教育機関。神学校。ロシア革命後に各地で宗教否定の政策により多くのメドレセが破壊された。

ミナレット: 礼拝時間を告知する呼びかけ（アザーン）を行なうための塔。

午後も城壁内をシュンコルさんの案内で、バザールにも入る。子どものおもちゃ、人形のぬいぐるみ、お菓子、CD、ウズベク名物のコーランの書面台、ウェディングドレスから家具や電気製品、金物などありとあらゆるものがそろっていて地域の生活を支えている。

夕食はホテルのレストラン。現地の音楽舞踊集団のにぎやかな演奏も。夕食後 9 時過ぎに外に出てみると、まったく遮るもののない抜けるような星空。こんなきれいな満天の星を眺めることができたのは子どものころいつのことだったろうか。オリオン座の小三ツ星（真中が有名な大オリオン星雲）もはっきりと見える。

9日(日)ヒヴァからブハラへ 480km(約8時間)のバス旅行。

明け方6時過ぎ、夜明け前の城壁内を散歩。人影もなくまったく静かな石畳を回ると神秘的・幻想的なミナレットや城壁のシルエット。ホテルで朝食の後、キジルクム砂漠を通り、ブハラに向かう。ラクダ草などはあるが見渡す限りの砂漠地帯。ラクダはこの刺のある葉っぱもないような草(といってもほとんど刺しかない低木)を口を血だらけにしてムシャムシャとたべてしまうというからその生命力はすごい。

途中アムダリア川岸で休憩を含め何度か休憩。「女性は道の右側、男性は左側」とシュンコルさん。もちろんトイレはない。そのあたりの草陰で開放的に、ということなのだが女性たちも「気持ちよくて癖になりそう」とか。



バスの中では十分時間があるので自己紹介。今回初参加の人も多く話の中でどこかで知り合っていた仲だったことがわかったり、にぎやかな交流となった。昼食は途中のチャイハナ(ウズベク流軽食の店)で焼いたナンと現地風うどん、シシカバブ、何しろ砂漠地帯の真中の一軒家なのでビールはなし。

夕方やっと人家が見えてきてブハラに入る。夕食の前にブハラ・ハーンの夏の宮殿に入る。もはや閉まっていたが交渉して開けてもらって入場、7時過ぎにホテル到着、夕食はブハラ・マリカホテルのレストランで。ホテルの近くのインターネットサービスで日本のニュースを確認、高橋Qちゃんがオリンピック出場を逃したニュースなど。30分500ス(約50円)

<現地ガイドシュンコルさんの話> 1991年に旧ソ連からの独立を果たし、国語も1997年からロシア系のキリル文字からラテン文字(英語のアルファベット系)に切り替えられているというが、ソ連時代が70年以上も続き、年配の層はいまさらロシア語の文字しか理解できず、若い層は英語と同じ表記が身についてきているというから聞きながら少し複雑な気持ち。



人口構成でも若者が多く、選挙権は16歳から。

ウズベキスタンの教育は、一部食費などを除き幼稚園から大学まで無料で、小学校5年、中学校4年は義務教育。高校は3年でほぼ全員進学するが大学付属高校と専門学校に分かれる。小中学校の夏休みは6~8月の3ヶ月(とても暑い季節)で子どもたちは他の学校の子どもたちと一緒にキャンプ生活で過ごす。大学はすべて国立で全国に250校あり、成績優秀の40%の学生は無料。60%の学生は有料。「日本では就職してもストレスで辞めてしまう若者が多い」というと、「それは甘い!日本でも親たちが戦後どれほど苦勞したかを教えないとだめですよ」と一喝。だから基本的に失業率は0。カリモフ大統領については「アフガン戦争のためアメリカが基地を置いていたが、基地撤去を要求して国民も喜んだ」と大いに評価していた。

10日(月) ブハラ

ブハラの街は13世紀の前半にはモンゴルの征服を受け、市街が破壊されていったんは荒廃した。その後のモンゴル帝国支配下で徐々に人口が回復し、都市は復興したが、15世紀のティムール朝まで政治的な中心はサマルカンドに奪われたこともあり、征服以前の繁栄には及ばなかった。16世紀後半に至り、ウズベク人のシャイバーン朝がブハラを実質上の首都と定めるとともに、ブハラは再び拡大に転じた。シャイバーン朝以来、アストラハン朝、マンギト朝とこの地方を支配した歴代の王朝はブハラを首都とし、このためこの時期の政権はブハラ・ハン国(ブハラ・アミール国)と呼ばれている。ブハラは中央アジアにおけるイスラム教学の中心地としても重要な役割を果たし、「聖なるブハラ」と呼ばれるようになった。

今日は終日ブハラ観光。まずは、ホテルから歩いてすぐ近くのおアシスの池・ラビハウス、中央アジア最古の神学校・ウルクベク・メドレセ、ミリアラブ・メドレセなどをまわる。



昼食はホテルのレストランで、午後は、4本のミナレットに囲まれたチャル・ミナル、中央アジア最古のイスラム建築といわれるイスマイル・サマニ廟、チャシマイ・アユブ、ボロ・ハウズ・モスクは現在でも毎日の礼拝に使用されているモスクでちょうど4時の定例の礼拝の時間、近所から何人もの人たちが急いで中に入っていった。

アルク城で日本語版のブハラの写真集を8ドルで買う。最初に買った人は「20ドル、安い!」といわれて買ったが、その後あちこちで「15ドル」といわれ、結局はこのアルク城内で買うといい、ということらしい。アルク城は歴代ブハラ・ハー



ンの居城で、最新の発掘調査によると、少なくとも紀元前4世紀頃から存在していたという。モンゴルなどの外敵に何度も破壊されては立て直され、現在の城は18世紀のもの。城内は1920年ソビエト軍による爆撃で焼け落ちてしまい、現在残っているのは石造りの部分のみ。内部には拷問室、家畜用の小屋、様々な店、モスクなどが並んでいる。城門をくぐると暗い通路の両側には囚人の地下室跡がある。

夕食はナディール・デヴァンペギメドレセでフォークロア・ショー鑑賞。美しい踊り子さん四人が次々と衣装を変えて踊る、また鮮やかな民族衣装でのファッションショーも行なわれた。

この日は外川さんの誕生日。ケーキカットでみんなでお祝い。今日は一日中歩いて疲れきってホテルへ。



11日(火) シャフリサーブス、サマルカンドへ バスで340km

古代のシャフリサーブスは、中央アジアの都市の中でも最古の歴史を持つ。アレクサンドロス3世は、紀元前328年から327年の冬にかけて、シャフリサーブスに滞在して妻ロザンナを娶った。



ティムールは、1336年シャフリサーブスで誕生した。しかし、ティムール朝の時代、シャフリサーブスは、徐々に帝国の中心の地位をサマルカンドに譲ること

となった。ティムールの夏の王宮またの名を白い宮殿と呼ばれるアク・サライ宮は、ティムールの建築物の中でも最も雄大であるが、現在では、その痕跡も、青、白、金色のモザイクで飾られた高さ65mの入口の塔を残すばかりである。アク・サライ宮の上部には、「もしも、汝我が権力に挑むならば、この建物を見よ」という文字が書かれている。

夕方6時半ごろ途中の休憩で小さなパーキングエリアへ。早速ビールを買って1300スム(約130円)途中南の方角の山々には雪が残っていて「白馬に似ている」という声も。今日の昼食も路線脇の民家(レストランではない)で、おいしくいただく。ここのトイレは単純、板を2枚渡しただけ。食後、ティムールが残したアク・サライ宮殿跡(白い夏の宮殿)コク・グシバズ・モスク、グンバズイ・サイダーン廟、ジャハングール廟、ハズラッチイ・イマーム・モスクなどの見学。

サマルカンドのグランドサマルカンドホテルへ到着。ヒヴァやブハラとは違ったきれいな都会という感じ。

夕食はホテルのレストランで。食事の後西川さんの人形劇「お一人座」公演。約30分のダイジェスト版だが西川さんのお母さんの一生を語る名演技。今回の旅行で思い出に残るのハイライトの一つ。



12日(水) サマルカンド

サマルカンドは十字軍戦争の影響を受けてシリア経由路が閉鎖された結果、インドから黒海に至る交通路を占めたホラズム・シャー朝の首都として繁栄していたが、1220年モンゴルによって徹底的に破壊され、人口の3/4が殺されたという。

14世紀末~15世紀にはティムール帝国の首都として繁栄。市街地の内部にはティムールの廟であるグーリ・アミールやビビ・ハヌム・モスクなどが、アフラシアブにはシャーヒ・ズインダ廟群が築かれている。ティムールの子、ウルグ・ベクの時代に天文台が築かれて、その遺跡が残されている。その後、1500年にウズベク勢力に征服されてティムール朝も滅ぼされた。

17世紀にはウルグ・ベクのマドラサと対になるシールダール・マドラサが追加されて現在のレギスタン広場が形成されるなど、中央アジアの主要都市のひとつとして機能した。1868年にはロシア軍に占領され、ロシア領トルキスタンに編入された。

サマルカンドはもともとブハラと同様タジク人の多い都市であったが、ソビエト連邦時代の

1924年、民族的境界画定によりウズベク・ソビエト社会主義共和国に区分され、1930年までその首都であった。

今日はホテルで朝食の後、終日サマルカンド観光、まずアフロシャブの丘の後、発掘物の展示博物館見学。次はウルグベク天文台跡、このウルグベクさんはアミールの孫でありながら天文学を研究し天文台をつくる。しかし息子に殺害され天文台は破壊されたという。1908年にロシアの研究者ビャトキンが発掘をはじめて全容が明らかになってきた。

シャーヒ・ズィンダ廟跡は階段を登った丘の上に立ち並ぶ中央アジア最大のモスク・ビビハニム・モスクで、シャーヒ・ズィンダとは「生ける王」という意味で、ムハンマドの従兄弟のクサム・イブン・アッパースがこの地に布教しに来たとき礼拝中に異教徒に首を切られた。クサム・イブン・アッパースはそのまま礼拝を続けた後自分の手で首を持って井戸の中に持っていき、そこで永遠の生命を得たという言い伝えがあり、聖者の墓の近くに14、5世紀に王たちが競って墓を造った。聖地なので巡礼に訪れる人々が絶えない。入り口の門を入ると階段が続いていてこの階段の段数を数えて登りと下りが同じだったら天国に行けると伝えられている。



階段を登り切ると参道の両側に廟が並んでいる。トゥグル・テキン廟、アミール・ゾダ廟、シリンベク・アカ廟、シャーディムルク・アカ廟などティムールの一族のために建てられた。参道を抜けるとウストアリネセフィ廟を過ぎると右手にティムール軍の将軍のアミール・ブルンドウク廟、その先にクサム・イブン・アッパース廟がある。

参道の突き当りには2番目に古いホジャ・アフマッド廟があり、その左右にはティムールの妻トゥマン・アカ廟、クトゥルグ・アカ廟が建っている。続いて市民の生活のにおいあふれるシャープ・バザールの見物。とにかく広い、何でもある。



昼食はホテルのレストラン。休憩の後はレジスタン広場。写真の右から、シェルドル・メドレセ、ティラカリ・メドレセ、ウルグベグ・メドレセシェルドル・メドレセの正面には偶像崇拝を禁じるイスラムとしては珍しいトラと人の顔が描かれている。

中庭に入ると多くの民芸品

の店があり、その中の伝統楽器店に入ると店主（有名な伝統音楽の継承者で日本の小泉元総理もやってきたとか）がいくつかの楽器を演奏してくれた。

夕食は現地のファミリーレストランで家庭料理。その後希望者だけホテルの近くの劇場でショウが開かれるということで30ドル。その後部屋に帰って水野さんと西川さんと3人で残ったビール4本を開ける。





かわいい人形のお店

13日(木) サマルカンドからタシケントへ。

ホテルで朝食の後タシケントへ向けて 350km、バスで出発。ところが Nさんが「部屋に杖を忘れた！」どうするか、引き返すか、杖ぐらい諦めるか バスの中はみんなが「どうしよう」「どうしよう」とワイワイ。ところがガイドのシュンコルさんは落着いて、「ご心配なく。この杖ではないですか」「アッ、それです」とNさん。実は彼は各部屋をまわって点検をしていたというのではないか。なかなかできたガイドさんに一同感激。その直後、バスが急に停車してドアが開いた。「何か事故でも？」と思いきや「ホテルにパスポートを預かったまま」ということで慌てて追いかけてきてくれたという次第。「命の次に大切な」パスポート。これがなければ出国できない！旅行ではいろんな事が起きるが今回は笑い話で一見落着。途中レストランで昼食となったが今回はバイキング方式。

タシケント市内に入ったが、観光の予定を変更して日本人墓地に参拝することに。第二次世界大戦後、満州からタシケントに強制連行された日本人捕虜たちはナボイ劇場建設などの作業にあたった。この劇場はその後の二度の大震災にもビクともせず、公共建築の中で唯一残ったことから、ウズベキスタンに日本人伝説が言い伝えられ、日本人を独立後の建国モデルにする大きな要因にもなったといわれる。シベリアのように極寒の地ではなかったことと技術を身につけていたこともあって扱いはそれほど厳しいものではなかったということらしいが、しかし無念の思いで亡くなられ、葬られた人たちに一同思いを寄せる。神官の宮田さんが祝詞をあげる。



2001年8月27日に、国立ナボイ劇場で木下順二作、團伊玖磨作曲のオペラ『夕鶴』が上演されたという。



ナボイ劇場前で全員写真



最後の夕食は金森さんとシュンコルさんの提案で予定を変更してシュンコルさんの実家（彼は自宅で生活している）でということになった。お母さんと妹さんの手作りの料理にビールとワインで乾杯。食事が終わってよいよ空港に向かう。ここでまた山下さんが「カメラがない」。食事をした部屋にもどってテーブルの下を探したがなかったという。シュンコルさんは自分の（お父さんの）車で

空港まで来たが「途中で電話があり家に引き返したらカメラの忘れ物、といわれた」と届け
ていただいた。これで道中「無事故」の記録となった。

空港でシュンコルさんと別れ出国手続き、帰国の途に。ところが 22:15 発の予定が、ウズ
ベキスタン機のタシュケント到着が3時間ほど遅れているという。しばらく待つようやく搭
乗。機中泊で14日正午過ぎ 関西空港着。

<金森千鶴子さんのお話> 1979年から添乗員の仕事を始めたが、世界中で行ってない
のは南米地域だけというベテラン。「一番人情の厚い国は？」の質問に「それはグルジア・
アルメニア。ソ連時代だったが毎回人との出会いがあって、バザールに行った時一人のおば
さんが『あんたたちどこから来た？』というので『日本から来た』といたら『私の家に来
て』と言うことになって、店をそのままにして家に招かれました。その家に行くと娘さんた
ちも一緒になってご馳走をならべてたちまち歓迎会に。ソ連の時代にあちらの学生たちと3
人でアルメニアを旅行中、のどが渴いたので水道の水を飲んでいたらみていたおばさんが
『家に入って』といってジュースを飲ませてくれて、そうしているとお隣のおばさんも『私
の家にも来て』ということで、またその隣のおばさんも『私の家にも』ということに。本当
に人なつっこい国でした」



タシュケントの街で



バザールで



レギスタン広場で



医学生たち



おばちゃんといっしょ

<消えゆくアラル海の問題>

ウズベキスタンを2つの川が西へ向かって流れているが、アムダリア河はこの国の南部国境にそって、シルダリア河は北部国境を越えてカザフスタン国内を貫通してともにアラル海に到達する。アラル海に到達する前に農場（主に綿花栽培、その他お米、野菜、果物）の用水として使用されてしまうので、今やアラル海は以前の1/3の面積となり塩分濃度も上がり、干上がった湖底は白く塩分が結晶して「死の海」と化している。もちろん今は魚など生息できない深刻な問題を抱えている。



年	海面高度 m	海面の面積 km ²	水量 km ³	塩分濃度‰
1960年	53.4	68,000 (100%)	1,090 (100%)	10
1976年	48.2	55,700 (82%)	763 (70%)	14
1987年	40.5	41,000 (60%)	374 (34%)	27
1989年頃	大アラル海と小アラル海に分断			
2000年	34.0	22,400 (33%)	-	50
2005年頃	大アラル海が西アラル海と東アラル海に分断			



1989/9

2003/8

1994年1月、カザフスタン・ウズベキスタン・トルクメニスタン・タジキスタン・キルギスタンの各 国は、アラル海回復のため、国家予算の1%を供出する協定を結んだ。小規模ながら運河改善など流量回復に努め現在でもシルダリヤ川からの流入がある小アラル海には、まだ回復の望みがあることから小アラル海のみを救済することを目的に大アラル海への水の流出・消失を防ぐため、1992年より堤防が幾度も建設されて来たが、**土砂**を積んだだけの原始的なもので、嵐のたびに決壊を繰り返して来た。そこでカザフスタン政府は世界銀行から融資を受け、2003年10月に堤防建設計画を発表。2005年8月にココラル堤防が完成した。

一方、大アラル海の縮小は依然として続いておりこちらの存続は絶望視されている。このままいくと2010年代には大アラル海が完全に干上がってしまうといわれている。さらに上流河川流域が複数の国にまたがっているため利害関係の調整なども難しい。ココラル堤防建設後、小アラル海に関しては順調に水位が回復し、予想以上の早さでかつての環境に戻りつつある。夏期の暑さも冬期の寒さも緩和され年間を通して雨雲が発生するようになった。砂嵐の頻度も抑えられ、かつての生態系もある程度復活し、渡り鳥も戻って来た。

漁業組合も再建され水産加工品は遠くロシア、グルジア、ウクライナまで出荷されるようになった。チョウザメの再放流も検討されている。また、汚染されていない飲料水も供給されるようになり沿岸住民の健康状態も改善しつつある。カザフスタン政府は湖を本来の**アラリスク**港に到達するレベル近くまで復元するため、2009 年から新たな堤防を建設する予定である。